

家庭道德學、公民道德學、政治學に分ちたるより、その老大なる體系に解剖のメスを振ひ、紙頁の不足を著者は託ちつゝも、その闡明に努力をなして居る。

アル・ガザリ、イブヌ・バリーツヂア、イブヌ・トファイルに夫々觸れた後、Averroes と歌人に傳へられたイブヌ・ルシドの思想を取扱ひ、遂に彼によつて成し遂げられた「哲學と宗教の一致」を檢討し、Dante が神曲に於て Averrois, che l'iran comento tes と稱へた、彼の有名な三段説を明かにして居る。

以上、讀後感の程度に過ぎないが、著者が、この荊棘の道を進むだ事に先づ敬意を拂ひたい。神學と哲學との二部門に分け、十二世紀を以つて止めた點については別に記述がない。孰れ著者としては考へのあること、信ずるが、今少し後世まで續けて欲しいとの望蜀の念もあるのは、餘り勝手な考へであらうか。

回教を觀る。しかも正しく觀る意味に於て、推奨すべき書の加へられたことを慶ぶものである。(昭和十六年七月、博文館、三圓、興亞全書一一)〔岡島誠太郎〕

蘭 領 印 度

別 技 篤 彦 著

(小牧實篤教授鑑修 世界地理政治大系第四卷)

激しい時代轉換の嵐の中に今やあらゆるものが新しく誕生し、創造せられんとしつゝある。吾々は聲を大にして地理學もまた在來の堅い舊敷を脱し、新しき、眞に日本的なる地理學が建設せられ

つゝあると叫ぶことができる。嚮に高く揚げられた小牧教授の「本地政學宣言」の旗幟に依つて吾々は吾が教室より新しき地理學が生育せられる無上の榮光を有するものであるが更に次の段階として必然的に新なる理念に基く具體的な世界各地の研究が待たれるに至つた。そして此處に待望久しかりし別技篤彦氏の蘭領印度の刊行に接するを得た。最近南方問題の喧しく論ぜられるに於て蘭印關係書籍の氾濫は全く一驚に價するものがある。而して本書の出現は凡ゆる意味に於いて在來の群書の止めを刺すものである。吾々は本書の出現を日本の爲に祝し、また眞に正しき蘭印全貌の本然の姿を明示した點に於いて蘭印自身の爲にも祝さねばならない。人は本書のうちに在來の地理學にみられるが如き單なる地理的事實の羅列と平板なる政治經濟事情の記載等の一切を揚棄して斯くも見事に美しく精妙に述べられた複雑な蘭印地政學の特性を一貌のうちに把握し巧妙に論述せられたる著者の非凡の才を感嘆せずにはをられないであらう。此の地域は著者年來の研究對象として來つたところであつて、單なる翻譯、紹介等の從來の蘭印關係の書物とは根本的に相異する所以も又正に當然のことである。従つてこれは南溟の天地に寄せる大和民族の郷愁であると共に八紘一字の精神に基く新秩序と人類愛への叫びでもあると説く著者の情熱は其の精緻なる研鑽努力と相俟つて讀む者の胸に深き理解と熱き感動の情を呼び起さずにはおかないのである。

第一編序論——蘭印地政學の特性の概観、蘭印を中心とする無数の島嶼を散布する亞淺地中海——其れは地球上の他の二大地中

海に比して更に一層廣大なる海面と其の有する凡ゆる地理的重要性が結合し地政學的考察の最も端的に究明せらるべきものを持つ——更に蘭印の地域を日本地政學の立場より論じたる堂々の論文である。蘭印の島嶼を一貫する自然的な運命共同體の性格を明にし、共存共榮の天の攝理の啓示を説く。そして蘭印こそは正しく我が最も近隣の國の一つに他ならず、吾等の故郷の一たる南海の島嶼群に對する吾等の親愛の情でありまた日本地政學の銳利なる究明であり、更に地政學的建設方策を論じたものである。第二編島嶼單位による地政學的考察、蘭印の特性たる島嶼を單位に第一章スマトラより第十一章ニューギニーに至るそれ／＼の島嶼の持つ地政學的意義と價值を明確に論述してあますところがない。第三編外力浸潤の歴史的性格。印度勢力の支配、元軍のジャワ遠征、回教の支配と歐人の侵入、ポルトガル人の侵入、和蘭人の侵入等の各章は外力浸潤の必然的舞臺である東印度の、極めて複雑なものとなつた歴史發展の核心を把握して蘭印の歴史的な性格を明確に描く。

第四編和蘭の政策の檢討、蘭印三百年間の支配者たるに至つた和蘭の政策を東印度會社時代より、蘭英の關係、有名な強制栽培法の施行、アチエ戰爭等を説き土民社會を巧妙に操縦して此の地域本來の東亞的性格を失はしめるに至つた顛末、更に現代に於ける七千萬インドネシア民族に對する政策と民族運動を論じ、檢討し來つて極めて嚴重な摘發を行つてゐる。

第五編蘭印資源の地政學的意義、熱帶の光と熱と水に恵まれた

る蘭印は其の資源の豊饒性が現在の蘭印に對する關心の最大なるものになつてゐるが、此の項は蘭印の經濟——フーンザールの定義する複數經濟——が如何にして歐米中心に生産せられつゝあり、又如何にして將來必然的に變化せらるべきであるかを論じ、更に此の資源輸送遮斷の地政學的意義を明快に論斷し、現今國民の抱く最重要關心事に明快なる指示を與へてゐる。

以上まことに、この書ほど明確に、堂々と日本の立場より蘭印を論じたるもの今までになく、本書の出現によつて既刊蘭印關係の群書は其の影を失ふであらう。地理、歴史專攻の學徒はもとより、すべての識者、更に今蘭印を凝視する國民すべて必讀の良書であると信ずる。(昭和十六年九月、白揚社發行、A五判二百四十一頁、挿入の地圖、寫眞豊富、定價二圓)(藤野義明)

滿洲國境問題

增田 忠 雄 著

吾が盟邦滿洲國が誕生してより既に十年を數へるが、未だ認識、檢討さるべき問題の多々存する事は論を俟たない。その一に國境問題がある。殊に滿蘇國境は單に滿洲國と蘇聯邦との國境としてでなく、ブロックとしての東亞に於ける蘇聯國と東亞共榮圈との接觸面として理解さるべきであり、此所に現實の問題として滿蘇國境の持つ重要性がある。

滿洲の地は古來支那生活圏の周邊の地に屬してゐた。露の東進、従つてそれとの接觸、交渉が始まり、境界問題の惹起し出したの